

2017年2月18日  
三陸新報

# 語り部をイタリアでも

上智大のフルコさん 気仙沼、南三陸視察

東日本大震災の記憶を後世に残そうと、上智大学で震災の研究に取り組んでいるイタリアのフラビア・フルコさん（40）が16日、気仙沼市と南三陸町を訪れ、震災の爪痕

などを取材した。8月ごろにイタリアで予定している発表会で、研究の成果を披露する。フルコさんは、イタリア語の教師として2011年8月から日本

に滞在している。現在は、日本学芸術会の支援を受けながら同大で震災の研究をしており、被災地に何度も足を運んでいる。

今回は、イタリアのカメラマンを伴って来

市。市内内の脇2丁目に残っている阿部泰兒さん（83）の阿部長商店会長Ⅱの自宅跡を訪れ、建物をカメラに収めたほか、阿部さんから震災の様子などを聞

いた。

阿部さん宅では、震災の数年前に避難用のらせん階段を設置。震災発生時にはこの階段を使って地域の人や従業員ら20数人が避難した。阿部さんも屋上に逃げて助かった。多くの命を救った建物であり、震災遺構として残す意向であることを伝えた。

フルコさんは、両市町で取り組んでいる震災語り部にも興味を示しており、発表会では写真の展示と研究成果と合わせ、語り部の必要性も強調するとい

う。「イタリアでも2009年に大地震が発生した。気仙沼、南三陸の取り組みを紹介して、教訓を生かせれば」と話した。



阿部さん㊤から避難の様子などを聞くフルコさん㊦